

：人間の自由は何よりも次のようになってゐる。即ち人は自然の法則に従うが、それはそのようなものとして、自己もその一部だと認めるからであつて、それらが神聖なもの、人間的なもの、或は集団的、個人的なものにして、何らかの意志により外から設定されるのではないからである。

科学について最も顕著な代表者達の構成する学士院アカデミーを想定してみよう。またこの学士院が法を執行し、社会を組織化し、しかも最も純粋な真理への愛を鼓吹し、その上最近の科学的発見成果に一致する法則だけを絶対的に指示するとしよう。さてそこで、私に判るのは、さような法規制や組織は奇怪で不自然だろうということだ。それは二つの理由がある。第一に、人文学（Science humaine）は常にまた必然的に不完全で、それが既に発見したものとこれから発見するものとを対比するならば、科学はいつも揺籃の時代にあるからである。それ故、もし人が人間の集団的または個人的実際の生を科学の与える最新の成果に、厳密にまた排他的に一致させようと強制するならば、社会だけでなく個人をもプロクルステス（ギリシア神話の横暴な強盗の名）の寝台にのせ、犠牲に供し、程なく分解させ圧死させることになる。人生は常に科学より広大だ。第二の理由はこうだ。科学学士院の実施する法規制に従う社会は、それ（社会）が理性的な性格をもつていてと理解するからではなく、もしそうならば学士院の存在は不用だ。学士院の実施する法規制を社会がそれと理解することなく尊敬するのは科学の名において社会に設定されるから：ということになる。この場合、さような社会は人間の社会ではなく野獣の社会であろう。……

：更にさような政治体制を不可能にする第三の理由がある。この種の主権を装つた科学学士院は、言わば絶対的なものだから、著名人で構成される限り、必然的にまた間もなく、それ自体で道徳的に知的に墮落する。それは今日既に明白なように、すべての学士院の歴史は彼等に少しの特権を認めただけでそのなつてゐるのを示してゐる。科学的偉大な才能が学士院に列せられると、即ち官許の学者になり、特許権をもつや否や当然下落して眠りこけるようになる。その人は自発性、強固な革命性、古い世界を破壊し新世界の基礎へ投企するのに常に必要な偉大な才能の性質を特長付けている不羈不羈で荒々しい活力を失う。その人はむろん礼儀正しくなり、有用で実務的な賢明さを獲得しようが、思考の力強さを失う。別言すれば墮落するのだ。

人間の精神と心を殺すのが特権及び特権的地位の固有な特性である。政治的であろうと経済的であろうと特権者は知的、道徳的に墮落した人である。それこそ例外を許さない社会的法則であつて、諸国だけでなくすべての階級、集団とともに個人に適用されるのだ。

：科学団体に社会の政治を委せるなら、それは程なく科学に専心するのをやめ、別な仕事にかかりきるようになる。その仕事とは権力の設定である。そしてその権力を永遠に維持しようとして、社会をいつまでも愚かにして置こうとするだろう。その結果は、そうした政治体制や指示が社会にとつて必要になるのだ。

：私があらゆる権威を押しけるといふのは正しいだろうか？ これ程私の真意から遠いものはない。靴を作るとする、私は靴屋の権威に相談する。家を作り、運河を作り、鉄道を作るのなら、私は建築家や技師に相談する。何かの特殊知識に宛てては学者に訊ねる。けれど靴屋や建築家や学者が私に指令するのは認めないのだ。私は彼等の意見を自由に受入れ、その知性、特質、知識が立派なら尊敬もするが、いつだつて私の批評や検証の権利は自分のものにしておくのだ。（だから）唯一の専門的権威に相談することで満足せず、幾つもの権威に訊ねる。そしてそれぞれの意見を比較し、最も正しいと思うのを採用する。だから特殊問題においては絶対的権威は信じないし、私が人間性やあれこれの個人についての真面目さに敬意を表するのは、個人に対し絶対的な信仰をもたないからである。もし

ここで言う科学とは人文学（哲学）のことだと言つてゐる。しかしコントなどの実証科学も含め社会科学者その他一般のテクノクラートの政治支配に言及してゐると考えてよ

そうすれば私の理性、私の自由と仕事とによって致命的打撃になるからである。というのはそれが私をして愚かな奴隷の境涯、他者の意志と利害の道具におとし入れるからである。……

：普遍的理念は常に抽象であり、それによって、ある意味で現実的生の否定である。科学はその普遍的な意味、一般的な関係、一般的法則においてしか現実的事実を知ることとも名辞することもできない。別言すれば、事実は絶えず変容するので、物質的個別的方面は捉えきれず、言うならば現実と生の息づく部分、移ろいややすく捕え難い部分は（科学では）捉えられない。科学は現実の思想を理解するのであって、現実そのものではなく、生の思想であって生そのものではないのだ。そこに科学の限界があり、また乗越えられない限界である。なぜなら科学は人間の思想の本質に基礎を置いているが、人間こそ科学の特殊な機関だからである。

この性質において科学の抗い難い権利と偉大な役割があるが、またその致命的無能力と悪機能もある。そして何よりもその官僚的特許代表者達により、生を支配する権利を備える。科学の仕事は一過性の現実的事物の一般的関係を明白にすることでである。即ち物理界と社会の現象発展に個有な一般法則を知り、人類の進歩に不動の標識をたてるのだが、それによって一般の状況を人間に知らせる訳だ。こうした厳密な観察が必要であり、無知や忘却はいつでも致命的な欠陥になるのだ。別言すれば科学は生の羅針盤である。しかし生ではない。科学は不変で非人間的で一般的、抽象的、無感動であり、理念の、反省され或は心理的な複製である法則のようなものだが、それ故、頭脳の所産で（想い出すのは、科学が物質的器官による物質的所産に外ならないこと）ある。生は全く移ろいやすく、一過性であるが、それでいて現実と個別性の、感覺性、苦しみと喜び、熱望、配慮と情熱のすべてである。自発的に事物と現実的な存在を創出するのは生だけである。科学は何も創造しない、生の被造物を明白にし確認するだけだ。そこでいつでも科学者は自己の抽象世界から抜けだし、現実界において生ける被造物と混合するが、彼等が提示したり創造するものは、いつも貧弱で奇妙な程抽象的で、血と生

Bの唯物論者としての見解

命がなく、死産である。それは丁度ワグナーの創造したハ一寸法師Vやゲーテの不滅の博士ファーストの弟子みたいである。だから科学は生を明らかにする仕事があるのであって、生を支配するものではないのだ。

科学及び科学者の政府は、実証派の人びと、オーギヤスト・コントの弟子達、それにまたドイツ共産主義の教論派の弟子達がやっているが、あれらは無力で風変わりで非人間的、薄情で抑圧的にして収奪し犯罪的だ。科学者などはさような者として、私が神学者や形而上学者について語った通りである。彼等は個人や生きている人間に対し、感情や心をもたないのだ。（だからと言って）彼等を非難するのはあたらない、その職業からの当然の結果だからである。科学者である限り、彼等は一般性、絶対的法則しか興味をもたず、他にしようがないのである。

現実的で生きている個性は別な生きている個性によってしか知覚されない。思索する個性や一連の抽象に依る人間は生の直接的触れあいの外や上に人を置くのである。そこで彼等にとっての人間は多かれ少かれ類の典型、即ち一個の規定された抽象としてしか存在しないのである。例えば一匹の兎がいるとすれば、それが典型として立派であればある程、学者にとっては自然の本質、或は類の法則を破壊する程顕著になりしめるとの希望があれば分析しても幸福である。

これは今日、数多くの狂人達が人間に対して同じような多くの実験をやりかねないと言っても反対する人はいないだろう？

もし自然科学者が生きた人間を分析しなかったら、それは科学とは言えないが、しかしそれを彼等に思いとどまらせるのは実に生の強力な抗議によるのである。自己の生存の3/4を研究に費す人、実際の組織において、ある種の部分的の世界を作っているなら、そしてそれによって彼等の心だけでなく精神をも傷めているなら、その人達は特に科学者であるだけでなく、多かれ少かれ生活人でもあるのだ。

然しだからと言って誇りとするのは当たらない。学者が今日、兎を扱うように人を取扱わないと確信

科学的社会主義者の人間性は何に起因するか、人間を具体的になく抽象的に取扱うことそれである。

科学者のカースト  
についてはN・ヴ  
エルシアエフも述  
べている。

### 科学と芸術の差異

しても、学者集団は生身の人間を科学の実験に付すかも知れない恐れが残るからだ。それはむしろ興味深いかも知れないが犠牲者にとっては不快であろう。また例え個人の集団に実験を施さなくても、社会にそうしないとは限らない。そしてそれを絶対に阻止しなければならぬのだ。学者集団は実際の組織において、科学を独占し、社会の外に在ることで一種のカースト(身分制)を形づくるが、これは司祭のカーストと酷似している。即ち科学的抽象が彼等の神であり、諸個人は彼等の犠牲であって、彼等が特許的な司祭職だというのだ。

科学は抽象の分野から出ることができない。その点で科学は芸術の非常な下位にあるのだ。むしろ芸術も一般的な型だとか、状況一般を扱うが、それらを個有な技巧によって肉付けするのである。勿論、芸術のこうした形式は生ではない、しかしわれわれの想像力において生の記憶や感覚を少からず呼び醒すのである。芸術はその構想する類型や状況を個別化するのだ。つまり肉や骨のない個別化の方法によって、従って永続的で不死なのだが、芸術は創造する力をもっているから、われわれに生きた現実的な個別を呼び醒させ、如何にもそれが眼前で現われたり消えたりするので。それ故、芸術は或種の抽象から生への回帰である。科学はこれに対して生の移ろいやすく一過性の、しかし現実的なものを永遠に抽象的祭壇にのせて犠牲に供するのだ。

科学はまた兎の個性と同様人間の個性を知るところが少い。それは個性の原理を無視するというのではない。科学は原理としてはそれを完全に熟知しているが、事実として知らないのだ。科学は動物の類のすべてを熟知している、と同じく人間の類もだ。しかしそれは無限に個別的な現実的な生存、生まれ死にさようにして同じく移ろいやすい無数の個人に場所を譲るものとして理解するのではない。科学は動物の類が更に高度な類に引きあげられ、個別の原理が更に決定されること、個別はより完全でより自由になるのを知っている。それは人間がこの地上での最後のまともな完成した動物であり、個性を最も完全に、また最も顕著にその構想能力、具体化力、何らかの人格化を社会的個人的存在に於て普遍的法則として提示するのを知っている。そして最後に科学は、神学や形而上学、

政治や法律によって駄目にされるものではないこと、科学は生の本能や熱望に耳をかすし、究極では人間の尊厳が人類の最高の法であり、歴史の真の目的で、唯一の合目的性は人間性の附与と解放であり、また現実的な自由、社会における生きた各人の繁栄なることを知っている。何故なら少くとも国家によって、公的に代表される虚構の自由破壊、民衆を組織的に犯すことに基礎を置いた諸虚構にめりこまない限り、集団的な自由と繁栄は諸個人の自由と繁栄の総和で表わされる条件においてしか実現しないからである。

科学はすべてこうした事を知っているが、それ以上は進まない。抽象が科学の本質を構成しているから、現実的で生きた個性の原理を考えつくにしても、それはピエールやジャックの(個別性)ではなく、これやあれのでもなく、さようなものは科学にとって存在しないし、存在し得えないのだ。個人ですら科学においてはまたまた抽象なのである。

しかし歴史を作るのは抽象的個人性ではなく、活動し生きている諸個人である。抽象は現実的個人によってしか持運ばれないのだ。観念だけでなく、現実的に肉と血で満ちた存在(人間)にとって、科学は心がない。科学は人間とは知的社会的に発達した肉塊としか考えないのだ。とすればピエールやジャックを構成している特殊条件や境遇はどうなるだろうか? 科学が自己の永遠な理論に依存した例示以外に関心をもつとすれば、それは奇矯になり、権利を放棄して無に帰すだろう。そう望むのは不都合だ。科学は自己の法則に従うのである。科学は具体を知らない、抽象の中で動くだけだ。その仕事は、人類一般であろうと、民族、民衆、階級、個人であろうと、それらの存在や発展の状況または一般的な条件、即ちそれらの発展と頹廃、あらゆる方法でそれらを発展させ得る最善の一般的手段等に従事するのだ。科学がそうした関心事を大巾にまた理性的に達成するなら、その義務を果たしたことになるのであって、それ以上を要求するのは不正であろう。

だが科学の遂行し得ない仕事をそれに委せるのは、つまりその本質からして、ピエールやジャックの存在や運命には無知なのだから、そうしたものを委せるのは奇妙であると同時に危険であろう。科

歴史を作るのは諸個人である。

Bは科学の名による支配(例、科学的社会主義)を拒否するのであって科学を拒否するのではなく。

虚構の大義の犠牲になるのはやめようと大衆に訴える

学は(それらを)無視しつづけるのに、その特許的的代表者達(科学者の事:訳註)は決して抽象的人間ではなく、それどころか極く現実的な利害を有し、特権が決定的に人間に及ぼす悪影響に屈する生身でありながら、科学の名において他者の皮剝ぎをやるのである。それは丁度、神、国家、司法権の名において、あらゆる色合いの司祭、政治家それに法官がやるのと同じ手口である。

私が言いたいのは、ある程度科学に対し、特に科学による支配形態(contre le gouvernement de la science)に対し生の反抗をしなければならぬと言っているのであって、科学を滅ぼせというのではない。それなら人間性冒瀆の罪を犯すことになる。科学が領域外へ飛びだせないような仕方では、その立場に落着かせようとするのである。現在まで人間の全歴史は、無慈悲な何らかの抽象物の名譽にかけて、幾百万の不幸な人間を犯し血を流させてきたのである。それが神、祖国、国の力、国民の名譽、歴史的権利、司法権、政治的自由等である。そうしたものが今日まで、人間社会の自然な運動、自発的で運命的な運動としてありつづけた。われわれはそれに何もすることができず、過去に逆らわず、現在の運命にも従順である。人類にとっての教育の唯一の道がそれだったと信じよう。だからと言って騙まされてはならないのだ。支配階級の権謀術数の大部分に依るとはいえ、大衆においても迷妄で自発的運動としての抽象物のあれこれ、歴史上の吸血鬼、人間の血で養われるものに身を捧げてきたのでなかったら、あの少数者(支配階級)だって大衆に恐るべき犠牲を強いることはできなかった筈である。

神学者、政治家、法律家等がそこに何を見出しているかはわれわれにだってよく判っている。あの抽象物の司祭達は一般大衆の絶えざる犠牲によってしか生きられないのだ。だからそこを形而上学が同意を与えたとしても、少しも驚きはしない。それは不正で不条理なものをできるだけ正当化し理由付けるのがその仕事なのである。だが実証科学でさえ同じ傾向を示すものだからわれわれはそれを絶えず究明しなければならない。そこに二箇の理由がある。先づ(実証科学は)生の外側に設定され、特権団体によって代表されている。次にそれ(科学)は人類発展の絶対的目標または究極のものとして示される。しかし分別のある判断によれば、科学は最終段階で自己に対して施した施さなければならぬのであって、それまでは高度な目標実現(即ちこの地上に生まれ、生きそして死んで行く)の諸個人の完全な人間性の実現(即ちこのための手段にしか過ぎないと了解すべきである)である。

実証科学が権力に奉仕する結果になる政治参加を促す。

実証科学が神学、形而上学、政治及び司法権に対し非常に有利な点は次のものだ。教義が賞揚する虚偽と災いの抽象物の代りにそれ(実証科学)が提供する抽象的真実、自然一般と事物の論理、その普遍的関係と発展の一般的法則等である。科学が社会に大きな地位を常に占めるのはそのためである。科学は集約的なある種の意識を構成する。しかし一面ではそれ故に先行した諸教義(神学、形而上学)にまったく類似する。即ちその本質からして現実的人間を無視するが、その外での抽象物はどれ程真実であっても、存在しえないのだ。この根本的な欠陥をなすには、未来の科学は過去の教義以外から出発しなければならぬ。これまでの教義はその抽象物に宛て喜んで大衆を犠牲に供せんが為

に大衆の無知を予測し、そして肉と骨によって代表される人びと(支配する人びと)に利益をもたらしさせた。実証科学は現実的人間を考へることは全く出来ないのだという自己の無力を知り、自己の運命に専心すべきであって、社会の政治形態に参加するのは確実にまた絶対にやめるべきである。というのはもし巻き込まれると、科学の正当な配慮の特異な対象である抽象物によって、それが無知な筈の生きた人間を常に犠牲に供することしか他にできないからだ。

歴史についての真の科学は未だ存在しない。それは人が今日、非常に複雑な条件を予知し始めたからなるのだらう。けれどそれが完全にできたとして、歴史科学は何を与えて呉れるのだらうか? それは一つの歴史となり得る諸社会の、一般的、物質的、観念及び経済・政治・社会並びに宗教と哲学、美学と科学的諸条件の自然な発展の忠実で合理的図式を復元するのだらう。しかしこの人類文明の普遍的図式は例え詳細を極めたとして、一般的理解しか含まないから、その結果は抽象でしかないのだ。数十億の諸個人がその歴史の生きそして苦しんだ資料、勝利と悲哀の(彼の)戦車の下に踏みつぶされた犠牲者の巨大な虐殺による勝利(あの無名の数十億の諸個人がいなかったら歴史の偉大な抽象

歴史科学について

的成果はあり得なかつた筈だ。ここで記しておくが、あの成果に何の効果もたらさず、従つてわが年代記に占める場所はないだろうというのである。抽象的人類の幸福のために、人は生き踏みつぶされた、それで終りだ。

だからと言って、歴史科学を非難すべきだろうか？ それは不正で奇矯だろう。諸個人は思想や反省によつて、また抽象物しか表現しない言葉自体によつても捕捉されない。即ち現在と過去において捕捉されないのである。また社会科学でさえ、未来の科学であるが、これも諸個人を無視しつづける。われわれがそれに要求する権利があるとすれば、社会科学が諸個人の苦しみの一般的原因を忠実に確かな手で指摘して欲しいと求めることだ。そしてその諸原因によつて、社会科学は抽象的一般に宛てて生きた人間を、残念なことに、しばしば犠牲にしたり従属させることがあるのを忘れて欲しい。そしてまた社会科学は社会における生きた諸個人の現実的な解放に必要な一般的条件を示して貰いたい。それこそその仕事である。それこそ社会科学の限界であり、その活動が乗り越えられない無力と不幸なのである。ところが特権的代表者達、その司祭達（科学者のこと）（訳註）の偽の教義と政治支配がこの限度を越えて開始されるのだ。例えば民主社会党员の名を冠しようと、今こそさような司祭者達と手を切るべきである。

もう一度言おう。科学の独自の仕事は道筋を示すことである。しかも政治支配や教義の束縛から解放され、その活動の充実にあたるべきだ。生のみが創造するのだ。

（神と国家）

### 国家について

：国家に支配的な思想は、決して中立の思想ではない。それは通常、幾つもの観念、幾つもの利害、情念によつて現実的に決定された一つの思想である。それ故、二つの異なる種族階級としての国民と支配する種族間の衝突の場になる。むしろ国家は、不偏不党性、抽象的正義を与えるよう装う、それ

国家の活力と強力は常に政府形態を通し支配する党派の勢力に他ならず従つて民衆への利害も党派的なものとなる。

が国民のものであらうと階級によるものだらうとすべての個別的利害から超越し、何か一種の八摂理Vのような形で、人の社会的習俗的種族的立場に関係なく、すべての臣民に公平無私な幸福を設定する様子をする。しかし、それこそ公的生活の偽善と陳腐な表明の一つで、どんな愚者でもたやすく理解できるのだ。

歴史は政府の存在するところはどこでも、勝利した支配的な党派があつたし、あるべき事を示している。国家の活力と強力はその符丁にしか過ぎない。

人は三異種族が一箇の連邦政府に属し、活力があり平和で誰も支配しないスイス連邦共和国を例示するだらう。しかしスイスでその実態が可能だとするには、少くとも今日迄、異民族の相当な独立性が州の實質的な自治によつて保障されているのを見失つてはいけない。今日の空気が多分にそうなっているように、もしスイスで中央集権化が進むならば、人数の最も多い種族が自分達の理念、情念、利害、そして政府を他の二種族に押しつけることになるだらう。

：国家の理念、諸国家の存在は人間の正義、國際的平等と一致しないと人は理解している。それでは國際的正義は実現不可能なユートピアか、不平等が人間世界の運命的法則で唯一の現実的なものだらうか？ それなら神を信じ、この世界に絶望するがよろしからう。

至る所で國際的人間の正義を実現するには一つの方法、しかし只一つの方法がある。その正義は明白に諸国家の存在とは一致しない、そしてそれを可能にするには、諸国家を廃止しなければならぬのは明らかである。諸国家と共にある不平等の永続性として人が国家の力と名づけているものの發展によるのが一つ。もう一つは人間の正義、平等、自由、すべての人の幸福と人間的な友愛が諸国家の廢墟の上に到来したこと。この二名辞の間にはどんな中間も妥協も不可能だ。そこで現在、各人はそれぞれの利害と趣味によつて選択する。むしろ特権階級は前者を選ぶだらう。また同じ理由で被抑圧者、収奪される者、苦しむ人は、別言するとプロレタリアートは後者を欲求するのだ。

それ故統一国家を構成する多数者の種族にとつて少数部族の取扱ひが問題になる。

もし君が正義を愛するならば、その根とその成果である神学的なもの、メタフィジックなもの、政治的立法的、また常に野蕃で権威からである原則を破壊せよ。あらゆる政府を廃止せよ。社会の保護者、教師、組織者、指導者という運命的で奇妙な役割を直ちに放棄せよ。種々のコレクティブ、<sup>アソシエーション</sup>、<sup>グループ</sup>、<sup>コミューン</sup>に完全な自治を委せよ。それらがそれぞれの自然な引力によって、必要によって、利害と需要によって自由に連合するならば、君は民族、言語、伝統、習俗等の問題が落着くところへ落着くのを認めよう。さような思想はいわゆる国家と共に実現の可能性を失うのだ。嘗て国家は他の国家に支配される恐怖から産まれ、それぞれの経済や労働を編成したり、産品を交換するとか、コミニケーションの道をつけ、公衆教化を拡張する必要に迫られていた。そしてまた目には見えなけれど人間の連帯の強力な法則によって引きつられ誘導されていた。それは政治法ではなく自然法であって、（それ故に）今日に至るまで人間社会の歴史的発展のすべての決定的源泉であり原因でありつづけたのだ。ところが政治法というものは組織的な否定でしかなかった。（何故なら自然法によれば）それぞれが完全な自発性と自由の本能に従い、歴史に依って発展し、実際の経済状態によって決定される<sup>アソシエーション</sup>や<sup>グループ</sup>や<sup>コミューン</sup>は、時期的には長い短いの苦しみを経て、過渡期やためらい、また闘争の期間を経て、均衡を保つようになる。それは何らかの権威が上から押しつける気まぐれや抽象的な法に順応するのではなく、各自の現実的な存在、必要性、活力に一致するのである。そして今日、有力な情熱となり言はずは、大衆の宗教ともなりつつあるのは、正義、平等、自由の精神に鼓吹されて、すべての労働と人間の観点からして大規模な<sup>アソシエーション</sup>の組織作り<sup>アソシエーション</sup>に手を貸すことである。この新社会に於てこそ人間の正義の実際は、今日不正義が一般であるように、自然なものとなるだろう。（ジユラ同盟の同志達に）

：国家とは何か？ 征服という原始的な不正義な事象から当然生じる社会的諸関係と諸事象の現実的立法組織である。教会とは何か？ これらの諸関係と事象に対し、神によって何らかのものが与えられると見做すところの精神的なまた聖別する組織である。征服と分ち難い残酷さや不正義のすべてを欲

求し、命令し、設定すると見做されるのは神の秘儀である。その中でも特に被征服民の隷属がある。

すべての国家は、それが存在する限り、初源の建国以来の二要素をもちつづけている。隷属と戦争だ。前者は国内向けに、後者は外国向けである。すべての教会はどんな仮面を被り、人間らしいことを言おうと、聖別と祝福を強いるものだ。人間の国家とか自由国家は無意味か矛盾撞着で、それは理性的教会と同じく無意味で不条理だ。前者（国家）は不平等と敵意を、後者（教会）は虚偽と人間性の理論的否定を現わしている。（反マッツイーニ論）

## 革命

：それ自身が解体する旧世界、それは權威的神学の政治的には教理論の文明、初めは貴族で次いでブルジョワしかもいつだって収奪し支配し抑圧する教会と国家の文明がある。新しい組織、幾百万の労働者の組織で労働、平等、自由、科学を基本とすることしか知らず、更に言えばこの地上に真の人間性を樹立すること、彼等の連合の外側には腐敗と墮落しか認めず、その旧世界の廢墟の上に人間の秩序となるものを樹立しようと努力する。その解体と形成は共に必然であり、よく知られているように連関している。後者は前者の決定的成り行きだ。その間の移り変りが革命と呼ばれている。

（ジユラ同盟の同志達に）

：革命は子供の遊びではない。また虚栄者だけが殺し合うアカデミックな討論だとか、またリンクをぶちまいて闘う文芸的果し合いではないのだ。革命、それは戦争であり、人間と物の破壊を謂う戦争である。人間性が未だに進歩についてのより平和的方法を創出できないのは悲しむべきことだが、現在迄のところ、血の洗礼を受けなければ、歴史の中では何の新しいものも生まれなかった。しかも反動は革命のこの関係においてのみ非難されるべきである。反動は常に革命以上に流血してきた。一八

ベルンの熊<sup>1</sup>はS.  
ネチャエフが政治  
犯としてなく刑  
事犯として引渡さ  
れたことに対する  
Bのスイス政府批  
判の書

Bの革命見聞記は  
アナキーの原型  
を戦うパリ市民に  
認めている。幸徳  
はサンフランシス  
コ大地震にそれを  
みたし、われわれ  
は「カタロニア讃  
歌」にも同じアナ  
キーを認めてい  
る。

四八年六月と一八五一年十二月のパリでの虐殺が例証になろう。この時期の他の諸国の専制政府の野  
蕃な弾圧、それにその後における数千、数百万の犠牲者が闘いの結果生じたのだから、この種の政治  
的社会的状況の熱病期を反動と呼び慣らわしているのだ。

本當の革命家や反動者である為には、当然違反や犯罪を構成している刑法と民法の視点での行為を  
犯さない訳にはいきまい。しかし現実的で真剣な視点に依れば、反動であれ、革命であれ、それは避  
け難い不幸だと思われるのだ。

(ベルンの熊と聖ペテルスベルグの熊)

### 1848年2月革命

：遂に二月革命が始まった。パリで人が闘っているのを知ると、何が起きてもよいように準備して知  
人のひとりからパスポートを借り、パリへの旅に出ました。だがパスポートは無駄だ。Aパリで共和  
国宣言がでた。V国境で聞いた最初の言葉がそれでした。このニュースに私は身振いました。歩いてヴ  
レンシアまで来ると、鉄道は破壊されていた。至るところ群衆がいた。熱狂した歓声、どの街路でも、  
そして公共広場と建物には赤旗が垂れ下げてあった。廻り道をしなければならなかった。多くの地点  
で道は通行止めだ。私がパリに到着したのは、二月二六日、共和国宣言の三日後でした。道中で私に  
興味があったのは多くありました。ですが陛下、パリでの印象を申しあげましょう。あの巨大都市、  
ヨーロッパ文化の中心地が突如コーカサス地方の野蕃の地になったものでした。どの街路にも、至る  
所、パリケードが山のように積み上げられ、屋根に届く程でした。そのパリケードの上や石と壊れた  
家具の狭間にはジョルジア人(山地部族)が山の狭間に居るような具合に、美しいズボンを被いた労  
働者達が火薬で真黒になり頭から足のつま先まで武装していました。恐怖で顔を引きつらした香料商  
人が窓から怖わごわ眺め、街路と大通りには馬車一台見られません。年寄りの太っちゃ、鼻眼鏡をか  
けた風変わりな粹すじ、それに道化者が全く姿を隠し、代ってわが高貴な労働者達、熱狂し勝誇った群

集が赤旗を振り廻し、愛国的歌を歌って勝利に酔っていました。はめを外した歓喜と陶酔の中で、誰  
もが優しく、人間的寛大で正直で、つつしみ深く礼儀にかなない、親しみやすくそれでいて高尚でした。  
かような仕儀はフランスにだけ、そして正しくパリにおいてだけみられるものです。それから引きつ  
づき一週間、私はトルノン街の兵舎で労働者達と起居を共にした。そこはリュクサンブールの宮殿か  
ら指呼の間にあつて、兵舎とはいえもとは都市警備隊の宿舎だったのを他のと同じく、共和派の人び  
との要塞としてコーシディエルの軍管地とした訳です。私は友人の一人である民主主義者に招かれて  
そこへ滞在したのですがこの人は五〇〇名の労働者から成る別働隊を指揮していました。それで労働  
者を見る機会に恵まれ、朝から晩まで観察したものです。陛下、確認致しますが、是までの所、また  
社会のどの階級にしろ、労働者階級程高貴な自己犠牲に富み、真に心うつばかりの尊敬さ、振舞いに  
おける心くばり、愛すべき陽気さが同じだけのヒロイズムと組合わさったのは、教養のないあの単純  
な人びとを置いて他にはありません。実にこの人びとは彼等の長よりずっと立派で千倍も価値がある  
のです。彼等において特に感動するのは、規律に対する深い本能です。兵舎では規つた秩序や規則、  
強制などあり得ませんでした。にもかかわらずこれらの自由人程に長の希望を希望として体し、嚴格  
に秩序を維持し得たのは、それに正確に服従したのは正規兵どころか神様だつて顔負けでした。彼等  
は命令を要求したし、長にも要請する。しかも綿密に、情熱をもって服従するのです。その苦しい  
軍役の下で、何日もの間、空腹に耐えそれでいて優しさを失わずいつも陽気でした。もしこの人びと  
が、このフランスの労働者達が自己に応わしい長を見つけ得たら、その長も彼等を理解し愛するだろ  
うからして、彼等と共に多くの奇跡をなし得たことでしょう。

陛下、私はパリで過したこの一月を正確にお話し申しあげられません。あれは魂の陶酔の一月でし  
た。私だけが陶酔していたのではなく、誰でもそうでした。ある人には狂熱の恐怖が、他の人には狂  
熱の有頂天、正気でない希望がありました。私は朝、四時か五時に眼覚め、二時に寝る生活でした。  
一月中足にまかせて馳けつり廻り、すべての集会、会合、クラブ、行列、示威行進、デモに出ました。

別言すると、私は五感のすべて、皮膚のすべてで革命の気分を吸い酔い痴れていたので。それは初めと終りのない祝祭でした。私は誰とでも逢いましたが誰も覚えていません。各個人は無数の流浪する群集の中に解消しました。私は誰とでも話し合ったが、私の言葉も他人の言葉も思い出せない。その理由は、事件と新事実の動き、迎えるニュースに注意を奪われていたからです。この狂熱はどこまでも知らず、ヨーロッパ各地から到来するニュースで強化されました。聞いた話はこんな様子でした。ハベルリンで闘った、王様は会議を宣言した後でズラかったそう。ウインでも闘った。メッテルニヒもズラかった。共和国が宣言されたそう。全ドイツが蜂起したぞ。イタリア人はミラノとヴェニスで勝利だ。オーストリア軍は退却しているんだ。共和国宣言だ。全ヨーロッパが共和国になるんだ。共和国万才。V

全世界がひっくり返ったようなものです。信じられない事があたりまえになり不可能が可能に、可能が意味の判らぬ日常性になったのです。別言すると精神状態がおかしくなって、誰かがハ神様は天国から追放され、共和国になったんだ。V (Le bon Dieu vient d'être chassé du ciel, la République Y est proclamée) と言っても、皆が信用し驚かなくなったのでした。民主主義者がこうして陶酔から醒めていたかといえれば決してそうではありませんでした。しかし醒めようとした最初の人びとであり、仕事に就き、あらゆる攻撃に対応できるよう、まさに奇跡のように、力を結集したのでした。保守党员と反王室派の人びとは、ある日を期して保守派以上に保守的になり、言わば旧制度の人びとが民主主義者以上に奇跡やありそうもない事を信じるようになったのです。彼等は2×2が4だと信じられなくなり、テイエル自身ですらハわれわれに残された只一つの事は、自己を忘れ去ることである。Vと言ったものでした。この事実こそ、フランスにおいて地方のすべての都市とすべての階級が共和制を認知した時間の早さと異議なしを説明しています。

(告白)

近代社会主義は様々なニューアンスをもって多様であるがBはここでアナキズムの歴史的源泉を明らかにしその基礎をブルードンに確定している。

グラッカス・パブーフ(1760-1977年)フランス大革命時代の革命家。人民衆の護民官V誌を編集。平等思想を唱える。

## ソシアリズム 社会主義

フランス革命はすべての個人に、人間であるための権利と義務を宣言したが、その結果はパブーフ主義に終わった。パブーフは革命によって創造され、殺された数多くの活力に溢れた純粋な市民のうち最後の人だったが、ブウォンナロッチェのような友人達に恵まれるという幸運によって、古代国家の政治的伝統を近代社会革命の全く新しい理念に結合した特異な創意の下に結集したのである。(彼は)失われた革命を見て、ラジカルな変革を欠き、更に社会の経済組織に於ても、あの革命の精神に忠実であろうとすれば、すべての個人的先導性の代りに国家の絶対的な活動を代用するのは大体よろしくないともたのだ。彼の考えた政治・社会制度は共和制に一致するもので、それは市民の集約的意志によって表明され、私有財産のすべてを一度没収した後で、(財産を)すべての人の利益の下に管理し、各人に等しい分け前で再分配することだった。つまり、教育、訓練、生存手段、娯楽等は、筋肉労働知能労働にあてた各人の力と能力を尺度にしてすべて例外なく分配するのだった。パブーフの反逆は挫折した。幾人かの友人と共にギロチンにかけられてしまった。だが共和制社会主義者としての彼の理想は死ななかつた。あの世紀最大の反逆者であり彼の友人だったブウォンナロッチェが取りあげ、その人によって理想は神聖な秘宝として新しい世代に伝達され、彼がベルギーやフランスに創設した秘密結社に守られて、共産主義の理念が民衆の想像力の中に芽ばえた。一八三〇年から一八四八年にかけて、カペーヤルイ・ブラン氏によって立派に解釈され、明確に革命的社會主義(Le socialisme révolutionnaire)を樹立したので。社会主義の別の流れは同じ革命的源流から出発して、同じ目的に収斂(しゅうれん)しているが、手段によって決定的差異があるので、われわれは気まぐれにそれを教理的社會主義(Le socialisme doctrinaire)と呼ぶが、二人の傑出した人、サン・シモンとフーリエによって創出されたのである。サン・シモン主義は註釈を受け、発表し愛容して何か実務

エンゲルスの「空想から科学へ」の冗慢な記述に比べ、この間諜さ、そして何よりも他を空想社会主義と区別つけないのがよ。

フィリップ・ブナロッティ(1761-1837年)イタリヤの革命的な社会主義者、フランス革命期にパブリックと共に働く。彼の著書「平等のための反逆」は若き日のバクニンに影響を与えた。

ピエル・ヨセフ・ブルドーン(1809-1855年)フランスアナキスト。経済は自由連合に基き、国家は除去して、自由な組合の自由連合によって代替するよう提唱、自由連合論はバクニンに深い影響を与えた。

社会主義者は生の権利を主張する。

的な体系となり、神父アンファンティン師によって教会のように整備され、支持する友の大部分は今日、政治家や国家の要人となり、帝国に対し奇妙な忠誠を尽している。フリーエ主義はヴィクトル・コンシデラン氏が十二月二日までに改訂した「平和なデモクラシー」の中でその註解者をつけたのだ。

この社会主義の二体系の利点は、多くの類似性では差異があるにしても、主要なのはその深刻で科学的で厳しい批判であった。彼等は社会の現実的組織にそれを及ぼし、恐るべき矛盾を大胆に曝露した。次いで重要なのは、キリスト教を攻撃し、衝撃を与えたことだった。それをキリスト教の神父がよくやるような悪口とやり方で、物質と人間の情熱の復権の名の下にやったのである。キリスト教に於て、サン・シモンの徒は、肉の秘儀に基づき、司祭の新しい位階制を導入して、天才、熟練、才能による特権で大衆を収奪する、新しい収奪者の群れによる新宗教でもって代換えしようと考えた。フリーエの徒は数が更に多く、真面目な民主主義者だと言え、選挙で選ばれた長が支配し管理するファランステルを構想した。そこでは各人が自己の情熱の質に従うとともに、仕事と居場所をみつけるといふのだった。サン・シモン主義者の欠点は話し合いの必要があるところに顕著である。フリーエ主義者の二重の過ちは、先づ説得力や平和な宣伝によるだけで、何事もできると真摯に信じたこと、つまりそれによって富者の心に訴え、富の剰余をファランステルの住人に分けようと言うのだ。第二の過ちは、人が理論的に、即ち先験的には天国の社会を創設することができ、そこに来たるべき人間性のすべてを根づかせ得ると想像したことである。彼等が理解できなかったのは、その未来の発展に就き偉大な原理は公表できても、その原理に基づく実際の実現は未来の経験に委ねなければならぬということである。

全般的に一八四八年以前の社会主義者に共通する情熱は規則づくめであった。更にもう一つ。カペー、ルイ・ブラン、フリーエ主義者、サン・シモン主義者はすべて未来を教育したり組織化する情熱を持ち、またすべて多かれ少かれ権威的だった。

だがここにブルドーンが出現した。農民の息子で、実際と本能ではすべての教理的またブルジョワ的社会主義者の誰よりも革命的だった。彼は深刻で透徹した容赦のない批評で武装し、彼等の体系を破壊した。権威による自由、国家社会主義に反対して彼は大胆にアナキストを宣言した。そして彼等の古くさい自然神教や汎神論に対し、彼は率直に無神論を唱えるだけの勇氣があり、特に実証主義としてはオーギヤスト・コントと一緒だった。

彼の社会主義は個人主義であると共にコレクティヴズム(集約・集産)、即ち自由な連合による自発的な行動に基礎を置くもので、社会的経済の一般法則また政府による規則や国家の保護の圏外で、科学が発見したもの以外には従わず、その上政治的なものを経済的利益、社会の知性や道徳の下に従属させ、後にはまたその結果として、連合主義を建設したのである。これが一八四八年以前の科学的社会主義の状態だった。……

(社会主義は大革命の最後の子であるが、この時陽の目をみた長兄はロベスピエールやサンジユストの愛した純正共和主義であるとバクニンは言う。それはギリシア、ローマ市民の偉大な英雄的伝統を吹きこまれ古代の再生であって社会主義の理念は含んでいない。社会主義は人間の共和国であり、市民の共和国ではないとする。更に社会主義共和主義者は国家の偉大、軍事的強力と栄光を嫌い、自由と福祉を選ぶとする。)

：八祖国の為に死ぬ、それは最高に美しく、羨むべきことだ。これに対し社会主義者は生の積極的な権利、生命の生理と共にその知的、道徳的歓びに依存するのである。社会主義者は人生を愛する、そして素朴に楽しみたいのだ。彼の信条は自己からでて居り、社会に対する彼の義務は、権利と分け難く結ばれていて、お互いに忠実でありたいとし、ブルドーンのように正義によって生き、パブーフのように死にたいと思ふにしても、人間の生命は犠牲になるべきものだとか、死は最も欲ばしいものだ。

フランス大革命以來共和制が君主制や封建制のくびきをはずした後の政治形態としてヨーロッパの人士に定着した、Bも書いては共和制支持であつたがそれは所謂共和党のそれではない。

などとは決して言わない。

共和主義は硬直して居、特に愛国主義によってそうなるが、また宗教で準備されし残酷でもある。社会主義者は自然で、愛国者としては温和だ。しかし極く人間的である。別言すると共和主義的社会主義者と政治上の共和黨員の間には一つの深淵がある。一方は半宗教的で過去に属するが、他方は実証的、無神論者で未来に属するのだ。

一八四八年六月に壊滅したのは社会主義一般ではなく、特に国家社会主義だつた。それは權威的で規則づくめの社会主義で、労働者階級の正当な熱望や関心に豊かな満足を与えるのは国家に依るべきだと信じまた希望した。そして国家の全能で武装して、新しい社会秩序を希望し樹立したのだ。：

ブルードンの銀行はよりよい状況の下だと発展したに違いないが、ブルジョワの悪評と一般の敵意によって潰れてしまった。

社会主義が緒戦で破れた理由は簡単だ。本能と否定する理論は豊かで、それが特権階級に造反する多くの理由を付与した。しかしまだ積極的で実地的な理念を欠いていた。それこそブルジョワの制度が崩壊した上に建設される新制度にとってなくてはならないものだ。それが民衆の正義である。民衆の解放をめざして六月に闘つた労働者達は理念ではなく、本能によって団結した。理念は混乱しパベルの塔を押しさえ、混沌であつた。そこから誰も抜けきらなかつた。敗北の重要な原理になつたのである。

だからと言って社会主義の未来と現在の勢力が疑い得ようか？ キリスト教は天上に正義の治政を樹立するのを目的として、ヨーロッパでは勝利をめざし何世紀も要した。社会主義がそれとは全く違つた問題提起をして、地上に正義の治政を樹立しようとするのが、数年で勝利しないからと言って驚

くにはあたらなのではないだろうか？

私は諸君にあれこれの社会主義体制を提案する積りはない。考慮して欲しいのは、それこそフランス革命の偉大な原則を更めて宣言することである。即ちすべての人は物質的手段と自己の人間性を発展させる気力を持つべきである。この原則は次の問題意識に翻訳される。

すべての個人は男女を問わず生を受けた限り、各自の異なる能力の発展に当て、また自己の労働によつてそれぞれが活用する為に、ほぼ平等に手段が備えられた社会を組織することである。

組織すべき社会とは、そこではすべての個人は、それが誰であろうと、他人の労働を収奪するのは不可能であり、労働によって生産される現実には彼自身が生産により貢献しない限り、社会の豊かさをもたらす欲びに参加できないとするのである。……

確実なのはこの地上での自由、正義、平和は、民衆の大多数がよい生活をもたず、教育を奪われ、政治的社会的には無に等しく、現実には権利に關しては奴隷であり、休息や余暇もなく働かなければならず、そのようにして作りだした富といえ、今日の豊かさにもかかわらず、自分では極く僅かを保ち有して明日のパンも十分でない所では不可能事である。

確実なのはこの大多数者にとって、何世紀にも亘り酷い仕打ちを受けた人びとにとって、パンの問題こそ知性の、自由の、人間性の解放の問題に外ならないのだ。

社会主義のない自由、それは特権であり、不正義だ。自由のない社会主義、それは奴隷制であり暴力制である。

労働の尊厳性が何故損われてきたかを歴史的に究明している、Bは知的労働と肉体労働の分離を主人と奴隷、ブルジョワとプロレタリアートの分離の中に見、その解消による労働の復権を訴えている。

：わが連盟は（平和と自由の連盟）ジュネーブに在った（一八六七年）社会的経済的ラジカルな変革の要を高らかに宣言する。その目標は、民衆の労働を資本と地主のくびきから救出し、法律、神学、哲学（形而上学）に依らない更に厳正な正義に立脚して、つまり人間性に依らせること、また実証科学及び絶対的自由に依らせること、これである。（連合主義・社会主義・反教権主義）

### 労働について

：労働が富の唯一の生産者だから、各人は言うまでもなく、飢えて死のうと、砂漠や森へ入って野獣と共に生きようと自由である。だが社会条件の中で生きようと望む人なら誰でも、寄食者と思われたいくなければ、富の収奪者、いわゆる他人の労働の泥棒と思われたいくなければ、自分の労働で生活しなければならぬ。

労働が人間の尊厳と権利の根本である。なぜなら労働によって人間は初めて自由で知的になると共に、外的世界とその野蓄性に対し、自己の人間性と権利に対し、文明世界を創出することで創造者や征服者になるからだ。（しかし）古代世界において、また封建社会においても同じく、労働の觀念には不名誉がこびりついている。そして労働の神聖については毎日繰返される言葉を聞くのだが、今日ですらその大部分がこびりついていたままである。労働を不当に蔑視する二つの原因がある。その第一は古代人を特長づけていたもので、しかも今日ですら秘かな支持者が多いあの確信、即ち科学、芸術、知識及び権利の行使による人間らしさの諸手段を人間社会の一部分に与え、他の部分は当然その数こそ多いのだが、奴隷のように労働に献身させるべきだとすることである。古代文明のこの基本原則がその（古代文明の）崩壊の原因になった。市民の特権的徒食によって墮落し解体した都市は、他方ではその世界の継承権を排除された奴隷達！しかも奴隷制にもめげず道徳的で、労働それ自体の力による有益な活動によって彼等の原始力を保有していた！の目にみえない、ゆっくりだが絶え間ない活動

によって掘りくづされ、野蕃人達の攻撃に逢って陥落した。この野蕃人達もその出自では大部分が奴隷に属していたのだ。

キリスト教、あの奴隷の宗教は古代の無秩序を破壊するや否や新しいものを作った。征服者の権利によって当然生みだされた不平等に立脚した恩寵と聖別の特権は、再び人間社会を二陣営に分けたのだ。それが賤民と貴族、農奴と主人であって、後者に武器や支配の高尚な職を与え、農奴には卑しいばかりか呪わしい労働しか許さなかった。等しい原因は等しい結果を当然産むものである。貴族社会は徒食する特権者によって、無気力になり墮落して一七八九年、団結した強力な反逆的農奴と労働者の攻撃の下にうやうやしく去った。

それから労働の自由と権利としてのその復権が宣言された。けれど権利としてだけではなかった。実際では労働は依然不名誉で屈辱的だった。この屈辱の第一原因は、大革命によって除去されたとは言え、名目的には人間の政治的不平等の教義に於て構成されたもので、労働の実際的な侮蔑は第二の原因に委ねられなければならない。それは外でもなく、今日でも有力に存在している知的労働と肉体労働の分離で、これが新しい装の下で古代の不平等を再生産し再び社会を二陣営に分割した。即ち、法に依ってではなく、資本に依る嘗っての特権的少数者と強制される労働大衆である。しかもこの労働者達は法的特権の不正な権利によってではなく飢餓によって働かされているのだ。

事実、今日、労働の尊厳が理論上ではよく認められ、世論は働かずに生活するのは恥かしい事だとしていて。但し労働をその総体で考えるなら、二部分に分業化され、すべて知的で独占的に高貴だとされるものがあらゆる学問、芸術を含みまた学問、芸術、理念、発明、予測、管理支配、総務監督を適用する産業では、労働力を下部構造としていて、他方は知性や理念を要しない純粹に機械的な活動にまで引き下げられた手仕事を実施するだけである。（ところで）分業についてのこの経済的社会的法則により、資本を有する特権者達は、それぞれの個人的能力範囲からすれば少しも資格のない人々でさえ例外なく、前者（肉体労働）を民衆に委せたのだ。それから三つの大悪事が生じている。その

一つは資本を有する特権者達に、その二つは大衆に、その三つは富の生産にとって、幸福にとって、正義及び社会全体の知的道徳的發展にとつての悪である。

特権階級を苦しめる悪とは次のものだ。社会的諸機能の最良の部を我ものとしていながら、それらが知的道徳的世界でだんだん下品に成り下って行くことである。精神や学問、または芸術の發展にとつて、ある程度の余暇が絶対に必要なのは本当だ。しかしそれは日常の労働による健全な疲れを癒した後の自分で手に入れた余暇、正当な余暇でなければならず、そしてそれ故にその可能性は各人の活力、能力、善意の多少に著しく依存し、またすべての人に対し、社会的には等しいのでなければならぬ。これに反して、特権的な余暇のすべては、精神を強化するどころか傷めつけ墮落させ殺してしまうのだ。歴史がそう語っている。極く稀な例外を別にして、富と血縁の關係の下にある特権階級は精神に関する限り常に生産力が少く、科学・芸術・産業における多くの発見は大体いつても、若い頃は粗野な労働で生活しなければならなかった人びとによって行われてきている。

人間の性質はそのようにできているのだ。悪の可能性は必然的にまた常に現実を産みだし、個人の道徳性は彼の意志によるより、生きている環境や彼の存在状況に多く依存するのである。この關係において、またその他でも同じだが、社会的連帯の法則がなくては叶わない、それこそ諸個人を有徳化するるのであつて、人びとが良心にかかづらうよりも各人の社会的存在の本質に關心をもたせるからだ。また最も完全な平等の下での自由を外しては、社会にとつても個人にとつてもそれ以上の道徳的教化はないのである。最も真面目な民主主義者を連れてきて、何かの帝位に着かせて見給え、そして彼がすぐ降りなかつたら、きつと悪党になるんだ。貴族に生れつゝいた男が幸運によって、自分の血筋を輕蔑したり嫌がらなかつたら、また貴族を恥としなければ、その人は悪徳と虚栄にまみれ、過去に従つて息をしているとしても現在では無用であり、未来に対しては熱烈に刃向うだろう。同じようにブルジョワジーでは、資本と特権的余暇で養われた息子が、その余暇を徒食に、墮落に、荒淫に代え、或はまた労働者階級に対し恐るべき戦いを仕掛けるような具合になり、あの一七九三年の際にあつたよ

りももつと酷い革命を引き起して終りになるだろう。

民衆を苦しめている悪事ははるか容易に規定できる。彼は他人の為に働き、その労働に自由と余暇と知性がなく、それによつて墮落させられ、卑しめられ、圧しつぶされ、殺されるのだ。彼は他人のために働かなければならない。というのは不幸の下に生まれつき、あらゆる教化と道理のある教育を奪われ、宗教の影響によつて道徳的には奴隷となり、無防備で信用のない、主導性はむろんのこと、自分の意志さえ行使できない生活の中に投げ込まれているのだ。飢えによつて強制され、年端もゆかぬ子供時代から悲しい生活のために稼がねばならず、厳しい条件で自分の体力や労働を、何の考えや他人に強要する物質的能力もなく、売らなければならぬのだ。不幸によつて絶望に馳られ、時には反抗もしてみるけど、思想によつて与えられる団結や力もなく、誤つて導びかれ、より多くは裏切られ、職長に売られ、自分の耐えている悪をどうすればいいか判らず、しかもしばしば虚偽に感動し、是迄のところ、反逆に挫折して不毛の闘いに倦み疲れ、いつまでたつても昔ながらの奴隷に転落してしまうのだ。

この奴隷制は、資本が労働者の力を集約化した行動の外側にある限り収奪を続けようし、良く組織された社会ではすべての人に平等に分配されるという訓練が行き亘つていない限り、特権階級の利益しか發展させないだろう。しかも彼等に労働の精神面を委せ、民衆には肉体的力を活用させての粗野な活動だけで、いつでもその思想といえは自分のものでないもので動かされるのだ。

こうした不正と不幸な偏向によつて、民衆の労働は純粹に機械的な労働と労働家畜がやるのに等しい労働を前にして、不名誉とされ、卑しめられ、当然な結果はあらゆる権利を奪われているのだ。それが社会に引き起すものは、政治、知性、道徳においての計り知れない悪である。少数者が独占と科学を弄び、その特権の効果そのものによつて、知性と心を同時に失い、遂には指示能力が馬鹿になる位迄になっている。それというのも特許的特権的知性程仕末が悪く不毛なものは他にないからである。他方、民衆は科学を欠き、毎日の機械的仕事で押しつぶされ、自己の自然な知性を發達させるどころ

か駄目にしてしまい、自己解放の道を照らす光を奪われ、押し込まれた自分の小部屋で空しく苦悶し、また自己にとって力になる筈で、数とも頼むべき社会の存在自体をいつも脅かそうとするのだ。

だからこの種の知的労働と肉体労働に課された不正な分業は、組み代えなければならぬ。社会の経済的生産は相当に傷めつけられ、肉体活動から分離した知性は苛立ち、涸れ、衰える、しかも他方、知性から分離した体力は愚鈍になる。それ故、人工的なこの分離状態では、それぞれの片面だけでは何も出産せず、それが生産する為には、一つの新しい社会的な総合に再編成されなければ、それは生産的な唯一の活動を編成し得ないのだ。学問の人が労働し、労働の人が考えるようになって、はじめて知性的で自由な労働は、人間性にとっての輝やかしい最高の美しい尊称となり、その尊厳性の基本、権利、また地上における人間の力の表現と考えられよう。こうして人間性が設定されるのだ。知性的で自由な労働が集団化した労働であるのは必然だろう。労働のために各人が連合するかしないかは自由だとして、また想像力に依る労働、それには自然が個人的な知性の凝集を要請するからして例外とするのは当然だが、その性質に依って集団化した労働が認められる実業及び科学的技芸的事業で、誰によっても集団が選ばれるのは、集団が各人の生産力を驚くべき仕方で増殖し、また各人が一箇の生産連合の成員や共働者になることで、少い時間と極く僅かな労力で最大のものを獲得するという簡単な理由からである。

生産的で自由な集団は奴隷の存在をやめさせ、必要ならば代って主人や資本の所有者となり、総務管理から解放された労力の側では共働者の名目で（人々を）包含し、各企業によって要請される特殊な知識をすべて包含するだろう。そしてまたそれぞれの間では各自の必要と性質に応じて常に自由に組合わされるのだから、遅かれ早かれ民族の境界線を突破し、一つの巨大な経済的連合を構成するだろう。その連合は世界的な統計等の龐大で厳密且つ詳細な参考資料で啓発される会議を行うだろう。但しさような連合は今日でも未だ存在していないが、それが異なる諸国での世界的規模の生産を、管理、決定、分配についての需要と供給を組合わせ、そのようにして最早商業や産業の危機、強いられた停

滞、破たんを失くし、不安と資金の亡失をなくし、さようにして人間の労働は、各人を、すべての人を解放して、世界を再生させるだろう。

自然の豊かさのすべてがある地上は、すべての人によって所有されるが、そこを培養しない人間には所有されないだろう。

女性に男性と異なるにしても男性より劣るのではなく、男性のように知的で、労働し自由なのだからその権利において、政治的社会的すべての機能と義務において平等であると宣言するのだ。

（革命家の教理問答）

### 西欧の労働者階級

：現在、政治とブルジョワによって墮落している西欧世界を覆滅できるのは二勢力しかない。外からの蕃族、それは多分ロシアがけしかけ、プロシヤ化したドイツが用意した案内する道を歩むスラブ族かも知れない。それに内からの蕃族、プロレタリアートである。もしヨーロッパの旧世界に最後の奉仕をするべく運命づけられたのがスラブ族だとすれば、丁度、ゲルマン蕃族がやった十五世紀間、グレコ・ローマンの世界がそうであったように、人類の文明は少くとも相当の年月退化するだろう。それが自然の事実になるのは、ゲルマンの征服がそうだったし、またその期間に征服者と被征服民衆に比べて等しく不幸だった。（今度もしそうなれば（スラブによる征服の事）：訳註）少くとも数十年の間皇帝達がタタール人の遺産やドイツ人から受入れた科学的規律を、ヨーロッパにおける公序の二守護人とするだろう。

それ故、人類の利益と世界の文明と解放において、われわれはスラブ族の侵入によるのではなく、プロレタリアートの興隆による、政治的ブルジョワ的世界の必然的な覆滅にむけあらゆる努力をしなければならぬ。しかも後者が到来しないと、その到来が遅れると前者が必ず西欧に溢れでるのだ

から、後者が先を越すべきである。もしこの破壊事業が外からの蕃族の侵入によって行われるなら、人類の文明にとって不幸になるだろうし、またもし内なる蕃族によって、西欧のプロレタリアート自身の手によって行われるなら、それこそ（西欧の）栄光になるだろう。

西欧の労働者は、特に都市プロレタリアート、正確に言えば農民・大地の労働者から別れた限りの産業労働者達は、まだ未開の諸国の労働兄弟に対し多くの利点を持っている。彼等是不幸、隷属、奴隷制の恐怖、圧政者と収奪者に対する憎悪を共有し、解放への熱望を共にしている。そこにより大きい、より確固とした共通の基盤がある。それは文化の大いなる差異にもかかわらず全世界の労働者に理念だけでなく、本能や熱望、自然な傾向において一つの現実的連帯を可能にし、必要とさせるが、それこそ究極の目標へ向けての連帯である。そこに世界的友愛の基盤がある。だが不幸なことに、西欧の労働者は半教育によるくだらぬぬぼれの愚かさによって、当然ブルジョワ性を獲得し、またその長（親方）達によって籠絡されて騙し騙まされ、収奪される者とか従順な労働家畜のような具合に何らかの政党の中に囲いこまれ、あの基盤を離れ、全世界のプロレタリアートとして自己を関係するあの立派な友愛を忘れ、また認識しなかりたり軽侮さえるのだ。さようにして自己の活力、思想、平民の権利の源泉を失い、意図によるのは少いにしても事実として、小っぼけで奇妙なブルジョワになるのだ。それは経済的観点からすれば相変らず不幸で、道徳的にはもっと不幸である。というのは十分にブルジョワである何らかの政党の手中で、虚栄で欺むかれやすく、馬鹿らしい手先になるからだ。

しかしこの共通の基盤の外で或は特に上に立って、西欧の労働者はより未開の諸国のプロレタリアートが未だ発達させていない、または自覚の度合の少い（所の）強力な先導性（*Leadership*）を持っている。被抑圧大衆に共通な社会主義の本能を別にしても彼（西欧の労働者）は自己解放についての反省的思想や意志をもち始め、その個有な本能的熱望の本質や究極の目標を理解し、その目標は他国の労働者に呼びかけ示すことができるのだと知り始めている。プロレタリアート、世界の人類の解放の先導性は、明

白に彼のものである。というのは知識の集団的な発展が東欧のプロレタリアートのものに比べるかに先進しているからだ。

西欧の労働者は宗教理念、政治制度、経済的経験の三角関係の下にある。（とはいえ）西欧のプロレタリアートが国民学校で受ける教育によって確実な優越性をもつのだと考える訳にはいかないのだ。あの教育は零だ。ヨーロッパの文明化された多数の国において、例えばフランスでもよい、その多くの学校は紙の上や政府与党の論議の中にしか存在していない。帝国では極く最近まで、民衆の教育を熱心に希望するとか真剣に関心を払っているとの印象を受けるが、それでもまだ相当なものできていない。しかし自画自讃する諸国、例えばドイツではずっと以前から相当数の国民学校があり、価値ある教育が行われ、魂の中に自由への愛をたきつけ、精神と心を解放しているとはいえ、まだ英国とフランスからはずっと遅れていると言えよう。というのはそれらの国のプロレタリアートは理性的に処理するのは少くても、ドイツにおけるよりはるかに革命的だからである。これは部分的に（民衆の）気質、特に歴史教育の成果に帰せられよう。そしてより多くはその学校教育に負うのだ。ドイツの国民学校では空虚な大量の知識をそれこそ盗れるぐらいつめ込むが、それは教育ではなく毒殺である。それは学問（*science*）ではなく不道徳で不条理、組織的に撒き散らす虚偽だ。

読み、書き、算数、それこそ民衆の子供に有益なものである。それでもう十分で、私は外に不便を感じない。この三つの能力はそれだけでは何か形式的だが、各人の日常生活に応用することで、精神の発展に明白に貢献するし、習慣化によって、少くともあらゆる理念の初源として抽象化や一般化に役立っている。更にそれらは（抽象化・一般化の理念作業のこと：訳註）余暇や物質的手段を有する少数者にずっと後になって自己教育の可能性を付与するのである。しかしそれら（理念作業）の利益は破壊的で馬鹿や愚邁にする効果の方がはるかに大で、酷い虚偽が歴史や神学の真理の名によって横行し、民衆の子供達の精神と想像力を枯渇させている。それは知的道徳的毒殺であって、学問的に計算され且つ組織的にまた意図的に実施されているのだ。だからこの種の民衆教育の標語は、あきらめ

であり、従順だ。しかもそれがブルジョワの理想なんだ。むしろ自分ではなく民衆に対して与える理想だ。

ドイツのプロレタリアートで賞讃すべきは、与えられる教育にもかかわらず前進していることだ。所でそれは広大な教育、知識的なものによるのではなく、歴史であって、西欧の他の民衆と参加した歴史によるのだ。

歴史のない偉大な民衆とか種族は存在しない。スラブの民衆は、ロシア人も理解しているが、一箇の長い、非常な悲しみの歴史、多くのことを教えて呉れる歴史をもっている。しかしその教訓には偉大な教えが欠けている。それは中産階級の解放劇、その豊かさへの発展と力強さ、それに墮落のてん末を語るものを欠いているのだ。

よく理解しよう。それは肯定的教訓ではないことだ。即ち西欧のプロレタリアートは、もし崩壊するブルジョアジーの運命に間違いなく加担するなら、その意味で肯定的に受入れられるなら、滅亡するだろう。(これに対して)全く否定的教訓、決して従わぬ歴史的事例があるとすれば、プロレタリアートのできる限りの活力をもって(ブルジョアジーを)押し返すことだ。そして抗いがたくこの教訓は、解放の本能を目覚めさせたばかりか、西欧のプロレタリアートを強力にし、同じく今日活動させ社会主義思想の発展に働いている。ブルジョワジーの経験によって教育されたプロレタリアートは、初めに同調したため、その道具や犠牲になったが、今日では強力な敵になった。人間の権利を獲得し自己の道を見つけようとする事、それこそ社会一般の解放をめざすに外ならないのだが、西欧のプロレタリアートは今やブルジョワジーの希望するものとは全く反対のことをするようになったのである。(ジユラ連盟の同志達に)

ドイツの強権的コミンニストが理解する限りでのインターナショナルは、明らかに支配的階級を創出する方向にある。その結果は新ブルジョワが生まれ、それは製造業や都市労働者で構成され、支配

階級のように新らしい政治権力の保持者となり、**集団的な長**としての虚構で、決して国家の現実としてではなく、大地を耕す何百万人の上に在るようになるのだ。私が**現実**としてでなく**虚構**と言うのは、高度に中央集権化され、組織され、政治づいた大国家においては、都市労働者大衆によってではなくその人びとの長によってのみ国家が運営されるのは明らかである。即ちこの種の新ブルジョワジーまたは支配的階級の下での人びと、従って搾取されるのは都市労働者であり、その人びとこそ数こそ少いがなお多くの特権をもつブルジョワジー、いわゆる人民国家の指導者、代表者、官吏を生み出すのだ。

都市労働者が一つの貴族、支配階級または新政治勢力を形成するこの傾向は、不幸なことに西欧各国において多かれ少かれ固有のものである。それは数世紀に亘り発展してきたもので歴史の中では都市の急速な発達と相対的な農村の停滞による分離であった。またブルジョワジーが到る所で都市プロレタリアートの上に振ってきた影響と後者(プロレタリアート)がブルジョワジーの政治の進化に直接参加してきた今日までの積みかさねによるのである。その結果、農村労働者と都市労働者の間に利害の明白な対抗が表面化する。だが土地所有貴族と資本所有ブルジョワジーの間には現実的な対抗はこれまで存在しなかったし現に存在していない。ところでこの表面化は西欧諸国では、都市労働者の愚かさやブルジョワジーの虚栄によるもので、彼等はいわゆる教育によって高尚になったと考え、農民の無知を軽侮する権利があると思っているのだ。

社会革命の勝利を真に心がける人びとは、都市労働者と農村労働者の間にあるこの不幸な分離(反目)を嘆かざるを得ない。あらゆる努力でそれを打破るべきだ。なぜならわれわれは次のことを知っているからだ。

大地の労働者―農民が共通の革命活動のために、都市労働者に手を貸さなければ、都市の革命者達のすべての努力は必然的に失敗に帰するのだ。革命の全課題がそこにある。これを解かない限り、破滅は必然だ。

(ドイツと共産国家)